

シンポジウム

「持続可能な学校動物飼育の在り方を探って」

相模女子大学小学部教諭 三橋正英



はじめに

相模女子大学小学部は、神奈川県相模原市南区にある幼、小、中、高、大学が一つのキャンパスにある学校です。小学校での動物飼育は、山羊は1991年から、モルモットは2014年から飼育をしています。

1 学校で動物飼育することの価値

【保護者アンケート調査から】

近年、「学校だからこそ、動物飼育ができる」状況になっているように感じます。2014年にモルモットの学年飼育を導入するにあたり、対象とする小学校1年生の保護者にアンケートを実施しました。その結果、動物飼育をしている家庭は22家庭(約29%)に留まり、55家庭(約71%)が、動物飼育をしていないとの回答を得ました。一方で、学校での動物飼育を74家庭(約96%)が

希望するという結果を得ました。保護者が、動物飼育に肯定的でありながらも、家庭では難しい状況であると考えました。人としての素地をつくる学童期を支える小学校の場で動物飼育をする必要性を感じています。

【動物飼育の価値】

学校で動物飼育するねらいは、様々です。実践を重ねる中で、動物飼育の教育的価値を次のよう考えています。

(1)「主体的、自主的」な子どもの育成に寄与する。

その場所に、その時、偶然あつまった人が、出会いから関係を築き、協力して一つのことを成し遂げる子どもになる。集団との関わりの中で、自分の夢や願いを見つけ、集団の力をかりて、自己実現に向けてチャレンジし続ける子どもになる。そんな子どもに育ってもらいたいと願い、教育実践をしています。その基盤となるのは、「学習、生活する楽しさがある」「安全・安心である」「信頼できる友達関係がある」学級風土です。動物飼育は、この風土づくりに大きく寄与すると感じています。

(2)コミュニケーションの境界線に気づかせてくれる

他人との関係性、社会との関係性、自然環境との関係性を認識し、「関わり」、「つながり」を尊重できる個人を育むことが大切です。動物飼育の魅力は、他者意識をもって関係を築こうとする態度を自然に引き出すところですが、相手を意識して伝える、協働的に物事に取り組む態度は、小学校教育でつけたい力です。

自分中心のなかかわり方をとっている児童が、「関わりたい」という欲求を満たすために、おのずと動物のしぐさを観察し、心情を考えて接するようになります。学校で飼育する動物は、動物の習性を理解し、適切にかかわれば、だれもがある程度の関係

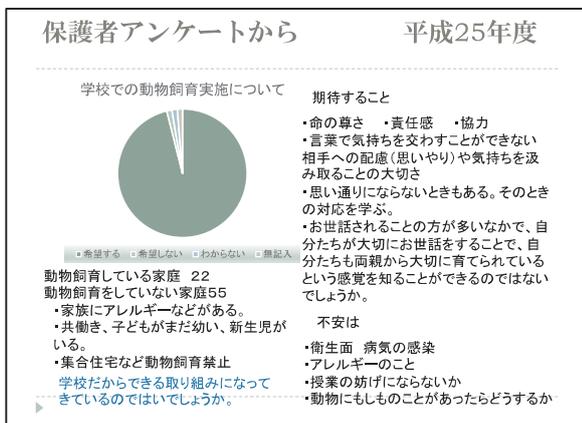


図1 導入前の保護者アンケートから

を築くことができます。日々のかかわりの中で、「私は、あなたにとって安全で、安心できる存在だよ。」ということを理解してもらうための関係の築き方や関係を保つために必要なことを教えてくれます。行動から、動物の気持ちを考えながら過ごす、ふれあう（遊んだり、話しかけたりする）ことは、相手を友達におきかえても大事なコミュニケーションスキルです。動物とのかかわりを通して教わることは、対人関係を学ぶ素地づくりになると感じています。

(3) 命を尊重し、大切する態度を育む

保護者が動物飼育に期待することは多岐にわたりますが、「命の尊さ」「責任感」「思いやり」などのキーワードは、多くの方が挙げています。そして、「生きている」ことは、直接触れ合う体験、飼育体験なしに理解することが難しいと感じています。特に、体験や語彙が十分備わっていない小学校低学年は、直接的な関わりから学ぶことが大切です。



図2 モルモットのお世話の様子

日々の関わりの中で、自分にとってかけがえのない存在なることが、命を尊重し、大切にする態度につながっています。目の前にある命に対してとる行動をもとに、ほかの命とかかわり方について考えることで、「すべての命を大切にしようとする」態度につながると期待しています。

(4) 人間関係を豊かにする

動物が介在することで、人間関係が豊かになります。一人の児童がモルモットを膝に抱いていると、数人の児童が集まります。動物を囲んで肩を寄せ合い、ふれあう空間や時間を一緒にすることが、交友関係を築

く機会になっています。

学校で動物飼育をする意味、価値はほかにあります。多くの実践が教えてくれます。大切なことは、学校で動物飼育をする意味、価値を常に問いつづけることと感じています。動物飼育をスタートさせる前に、学習のねらいをしっかりとっておくことは当然ですが、その後も動物と子どもたちのかかわりから学ぶことは多くあります。実践しながら骨太にし、付加価値を高めていくことが、漂流しない「動物飼育」につながると考えています。



図3 ふれあいの様子

2 持続可能な動物飼育の在り方を探して【学年飼育のメリット】

相模女子大学小学部では、モルモットの飼育を学年飼育でスタートしました。その背景には、『小学校での動物飼育体験のあり方から見た作文の分析』（中川美穂子・無藤隆 2015）や『学校での動物飼育の適切さが児童の心理的発達に与える影響』（中島由佳，中川美穂子，無藤 隆 2011）などの研究があります。

学校での動物飼育は、飼育をはじめた教員がかかわれなくなっても、継続できる仕組みづくりをすることが大切です。そのためには、①同僚教師（学年，教科部会）②管理職③先行実践している学校の先生④獣医師④ヤギなどの場合は協力牧場の方，大学（獣医学，農学系）等⑤保護者の方々などの連携，協力が欠かせません。

動物を導入する時の提案資料作り，導入してからの児童の生活づくりや授業作り，保護者からの相談対応など，飼育に関わって付帯してくる事柄も多くあります。一緒

に取り組む教員がいることで、これらのことを一人で抱えることなく、検討することができ、適切かつ迅速に対応することができました。

【動物飼育の導入実践】

導入前、導入時、導入してから今日まで、それぞれの段階で、取り組む事柄が異なりました。どのようなことがあったか、ポイントとなった事柄を紹介します。

(1) 導入前「やってみたいと思ったら」周囲の先生に呟く。

動物飼育をしたいという願いを同学年の担任教諭や研究部会の先生に話すことからはじめました。

話すことで、学校で動物飼育をする意義や飼育方法、授業のもちかたなどについて、漠然としていたことが、次第に具体的になりました。同時に、周りの方の動物飼育の経験値や飼育に対する不安などを聞き取ることができ、導入するまでの課題が整理できました。

情報収集は、インターネットを活用することが有効でした。実践している園、学校、団体牧場主、獣医学部のある大学や畜産技術センターのような施設、獣医師などに直接連絡もとらせていただきました。自分が抱えている課題を解決する糸口や手立てを得ることができました。何を飼うか、子どもたちとも話し合いながら決めましたが、最終的には、獣医師をはじめとする専門家の意見がよりどころになりました。

職員会議における提案は、複数回になりましたが、その度に内容が精査され、結果として周囲の理解を得られ、スムーズに飼育活動をスタートすることができました。

獣医師や先生方と相談したそのほかの選定理由

- えさやりや清掃など、**児童の手で管理ができる**
- 動物の成長の様子、特徴をとらえやすい
- 多様な活動の広がりが生まれる可能性のあるもの。
- 人になれる。性格が穏やか。だっこなど、**児童が安心してふれあえる。**
- 教室内または近くで飼育できる。
- 子どもが愛着をもてる＝感情を読み取ることができる
人と視線を合わせて感情を見せる動物

※ 事前に学校飼育動物に長く関わっている獣医師に相談

図4 飼育動物種選定の条件

(2) 導入決定後：飼育動物を迎え入れるための準備

導入決定後、学年担任、学校教職員、獣医師、保護者の方々と連絡を取り合いながら準備を進めました。

学年担任とは、①導入計画、②「動物飼育」に関する単元計画、授業案を作成し、その後、研究部会や管理職と共有しました。

学校教職員に対しては、飼育場所や児童のお世話の方法、活動時間などの情報提供を行い、動物飼育に対する理解を深めていただきました。

獣医師には、以下の助言をいただきながら導入を進めました。①動物飼育に関係する事柄、②日常の衛生管理、③動物アレルギーに関係する事柄などについてです。ま

単元計画を作成し、見通しがもてるように

研究部会の先生に相談



管理職に相談、職員会議



図5 導入に際して作成した資料

た、飼育動物の手配、導入時のふれあい体験の授業や教員研修もお願いしました。

教師のふれあい体験と獣医師による研修会



図6 教員研修 ふれあい体験の様子

保護者に対しては、アンケート調査を行い、期待や不安を把握しました。学級懇談会での説明に加え、獣医師に協力していた

だき、専門家の立場から、動物飼育について説明していただく機会を設けました。この時、保護者に対するふれあい体験もしています。飼育活動を安心して見守っていたるように保護者からの相談は、個別に対応もしました。

保護者に対して
懇談会時に、獣医師による動物飼育説明会実施



- ①学校で動物飼育をする意味
動物飼育が、子どもたちの成長に良い効果をもたらしている
- ②飼育動物のモルモットについて
- ③衛生面、アレルギーについて
- ④動物とのつきあい方
- ⑤家庭での週末飼育の心得
- ⑥家庭での週末飼育でトラブルがあったら

事前に、保護者アンケートを実施し、意見を集約しています。

図7 獣医師による保護者への説明会

(3) 導入期

児童に対しては、ふれあい体験や動物の気持ちを考える授業、飼育動物のお世話の仕方などを調べる授業をして、動物を迎える準備をしました。初めてモルモットを導入した時は、獣医師の協力を得て、授業をしました。

新規導入にあたり、きっかけづくり
校外学習 「動物ふれあい教室」

麻溝公園 動物触れ合い教室
ふれあった動物の種類
牛、羊、やぎ、チャボ、モルモット

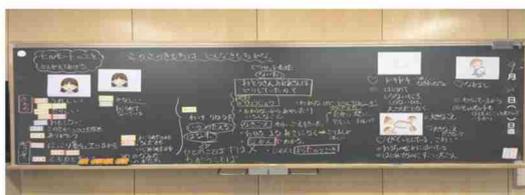


※モルモットは、飼育員さんに抱え方を教わり、一人一匹ずつ、15分ほど膝に置いて、なでる体験をした。



図8 校外学習 動物ふれあい体験の様子

国語「わけをはなそう」と連携させて



絵の表情から、どんな気持ちか考え、訳(理由)を添えて、説明する取り組み

「言葉は通じなくても、様子をよく見れば、どんな気持ちかわかる」と想像させたい授業

図9 動物の気持ちを考えた授業(国語と連携)

全校朝会で報告紹介もしました。少しずつ、他学年の児童も教室を訪れるようになり、ふれあい交流の輪が広がりました。導入前に教員研修をしていたことで、先生方が児童に上手にアドバイスしてくださり、混乱することなく進みました。



図10 導入時のふれあいの様子

(4) 展開期

飼育動物が来た日から、お世話が始まります。毎日のお世話やふれあいを重ねながら、より良いお世話の仕方やふれあいかたを児童と考え、ルールづくり、生活づくりをしました。校内には、動物や牧草に対してアレルギーをもつ児童もいます。お世話する子どもたちには、「ゲージやそのまわりを衛生的にたもつことは、モルモットの健康だけでなく、友達の健康を守ることになる。」ことを教え、常に教室環境が風通しよく、衛生的になるようにしました。

導入したら お世話開始

朝は、8時00分～8時20分
帰りは、解散後すぐ、20分間
班ごと、一週間交代

	月	火	水	木	金
水分え	A	E	D	C	B
えさ	B	A	E	D	C
トイレ	C	B	A	E	D
おへや	D	C	B	A	E
	E	D	C	B	A



ふれあいをするときの約束 (1回15分間など)
教室全体の整理整頓、衛生的にすることなどクラス全体の約束

図11 お世話当番表

保護者も関心をもって見守っています。そこで、日々の出来事を整理し、児童が張り切ってお世話をしたり、交流を広げたりしている様子を通信などで伝え、飼育活動への理解

を促すこともしました。

学校生活での飼育環境づくりをする一方で、学校休業日の飼育体制の確立も進めました。相模女子大学小学部では、希望されるご家庭を募り、週末は児童のご家庭に持ち帰ってお世話をしてもらっています。



図 12 休日のお世話の記録

保護者の方の感想は

- 保護者A**
動物を飼うことは初心者でしたが、一人子どもが増えてみたいで楽しかったです。なにか飼ってみたいなど思いました。本人よりも下の子が**お世話の楽しさに目覚めました**。ダンボールの掃除のやり方もどうやらモルモットが素直に外に出てくれるか、素早く片づけられるかなど、工夫して子どもなりにいろいろ考えていました。
- 保護者B**
夏休みに引き取り、貴重な経験をしたと思います。最初はかわいいなという感じでなでたり、見ているだけでしたが、2日位たつと、自分から小屋をきれいにしたり、餌をあげたり元気がどうか気にしたり、私もびっくりするほど気にかけてあげられるようになりました。一人娘なので、自分勝手にわがままになるのを心配しておりますが、短期間でしたが、家でお世話することにより、**成長を感じることができました**。
- 保護者C**
家族の一員として接することができ、とても愛着がわき、小雪ちゃんに会いたいです。子供も**責任を持って**毎日のえさやり、そうじなど**自分から進んでお世話することができてよかったです**と思います。

図 12 保護者の感想

休日のお世話についても、学級懇談会や獣医師からの説明会の中で触れ、保護者に対するふれあい体験をしておくことが、協力しやすい協力していただけるご家庭学校で飼育を始めて、児童が慣れた頃を見計らい、実施しています。

(5) 安定期（成熟期）

導入当初の授業は、生活科を中心に児童の反応もみながら、試行錯誤を繰り返し、一つひとつ作りあげてきました。この時期の主な課題は、次のようなことでした。

授業内容やカリキュラム検討し、国語の文章づくりの単元と連携させるなど、飼育活動に関わる授業づくりをしました。

- ・ 授業内容、カリキュラム検討
- ・ 飼育活動に関わる授業を骨太にする。
- ・ 教師間、児童間の引き継ぎの在り方を検討する。
- ・ 保護者、獣医師への報告のあり方。
- ・ 動物の成長段階に合わせた動物飼育の模索

国語「しらせたいな、見せたいな」と連携



- ▶ 観察したことを記録する文章を書く。
- ▶ 観察して、見つけたことを全部並べる。
- ▶ 一つの事柄につき、一つの文で説明する。
- ▶ 並べ替えて、つながりのある文章にする。
- ▶ 書いた文章を読み返す習慣をつけ、間違いを直す。
- ▶ 句読点を正しく使う。

図 13 児童作品 国語と連携させた授業

1年間の動物飼育活動は、下級生への引き継ぎ会をして終えます。飼育を通して気づいたことをポスター様式にまとめて発表したり、ふれあい体験会を開いたりして引き継いでいきます。



図 14 下学年への引き継ぎ会の様子

愛着形成ができていると、「大切に育ててもらいたい」という願いも強く、引き継ぎ内容が充実します。「別れ」体験からは、その後出会う命と共に過ごす時間を、大切にしようとする気持ちが育つことを期待しています。

命を見つめる

動物の老いをみつめること

死別体験



小学部で、ヤギの死を迎えることは3回あった。
 老衰寿命(2学期始業式の翌朝5時過ぎ)
 ⇒お別れ会をした後、火葬(骨は、校内に埋葬)

図 15 寿命を迎えた飼育動物との別れ

3 課題

教育改革の流れの中で、「英語」や「プログラミング」などの授業が加わってきました。動物飼育を継続するには、その価値をより明確にし、カリキュラムに位置付けることが必要です。そのために、日常生活の中の飼育活動と授業として扱う事柄を整理すること、教科間の連携を図り、飼育動物を題材にした授業づくりをすることが欠かせません。また、以下のような課題もあります。

- ・ 継承する過程で、形式的になる。
- ・ 飼育にかかわる費用の恒常的な調達。
- ・ 働き方改革の中での休業日のお世話

飼育活動が形式的にならないように、授業や活動の区切りで、授業のねらいに適した内容だったか振り返る機会を設けました。

児童に教える事柄、考えさせたい事柄、飼育観察を通して、気づかせたい事柄を整理しました。授業案などの資料をできるだけ作成し、次の担当者に引き継ぐように心がけました。この積み重ねによって、飼育活動の教育的価値が高められていると感じます。

提案書や実践を資料化して、残す。



図 16 資料化して、次の担当に残す

飼育に関わる費用の調達も活動の充実に伴い、予算立てしやすくなったと感じています。また、PTAの協力も得られています。

学校休業日のお世話は、徐々に経験されたご家庭が増え、軌道に乗り始めました。親子でお世話の様子を記録したノートが、情報共有の場になり、飼育活動を盛りたてています。また、緊急時に診察してもらえる獣医師の存在が保護者の安心感になっています。一方、ヤギなどの大型動物のお世話については、検討しているところです。

さらに児童に体験させたいことに、「命の終わり」を迎える体験、「命を誕生させる」体験があります。「命の終わり」については、その時、児童がどうおくりたいか気持ちを十分聞き、丁寧におくることをすることが大事だと感じています。一方、「命を誕生させる」ことについては、飼育活動が落ち着いてから、大人が十分議論し、理解を得てから行うことが大切と経験から感じています。

参考文献

- 1、中川美穂子 (2007) 小学校における動物飼育活動の教育的効果とあり方と支援システムについて 子供発達教育研究センター紀要だい4号抜刷 2007年2月28日発行
- 2、中川美穂子 無藤 隆 (2012) 小学校での動物飼育体験のあり方から見た作文の分析 白梅学園大学大学院 子ども学研究科修士課程 2011年度修士論文
- 3、中島由佳 中川美穂子 無藤 隆 (2009年9月14日受付, 2010年10月13日受理) 学校での動物飼育の適切さが児童の心理的発達に与える影響 日本小動物獣医学会誌 64 227~233 (2011)
- 4、八木良子 (2017) 「学校にウサギとチャボがいる～授業での活用の可能性を探って～」 動物飼育と教育 2017 23~29
- 5、日本初等理科教育研究会 学校における望ましい動物飼育のあり方 (2006 改訂版)